

『吾輩は猫である』写生

Junko Higasa 2015.12.17

自分が人間の一人とさえ思えるほど進化した吾輩の人間観察は、当然の成り行きとして生活上の必要と進化する。西洋に開かれた日本が、西洋に好奇心を抱くのと何ら変わりはない。そこで吾輩は人間をもっとよく知るために、前章に引き続き第四章でも「例のごとく」人間界へ忍び込む。

吾輩は脳内のスケッチブックに、20世紀の紳士モデルである鈴木藤十郎君を写生する。金田邸の庭から視覚を通じて形体を、縁の下から聴覚を通じて言葉を、苦沙弥邸で表情の動きを通じて心理を。こうしてみると目に見える事象だけでなく、無言劇でも人間描写は可能である。これは、写生文において「無言劇も優に成立しうる」という漱石の実証であった。

章末に記されたエミール・フランソワ・ゾラは、自然科学を文学に転用した「自然主義」定義者である。漱石の英語読みでブルヌチエルと表記されたフェルディナン・ブリュンティエールは、様式は生物のように進化するとして自然主義文学を攻撃した批評家である。そしてシャルル・オーギュスタン・サント=ブーヴは、ロマン主義文学者・批評家である。

漱石は、探偵のように表層のみを捉える自然主義文学よりも、内面をも描く絵画理論を移入した俳句の応用である写生文学を支持した。それが目に見えないところにも真実はあると言ったサント=ブーヴと「同じ位な学者だ」という苦沙弥の発言に繋がる。